

SA/TAを活用した簿記会計教育の回顧と展望

赤塚尚之 Naoyuki Akatsuka
滋賀大学 経済学部 / 准教授

はじめに

滋賀大学経済学部(昼間主コース)は、コア科目に対応するかたちで、SA(学部生)/TA(大学院生)による問題演習科目「コアセッション」を開講し、特筆すべき教育実践と謳っている。筆者は、科目担当のほか、特任教員・非常勤講師の世話役、学習教育支援室委員をはじめとする各種委員、さらにはSAを希望するゼミの指導教員として、なんらかのかたちで、着任以来、ほぼ毎学期、その運営に関与してきた。

科目担当の均等化に配慮があるとはいえ、筆者は、コアセッション科目について、他の教員を上回る水準の経験を蓄積してきた¹⁾。そこで、公然と語られなかった視点から、SA/TAを活用した教育実践を回顧し、展望しようと思う。

なお、以下の記述は、あくまでも筆者個人の経験に即したものである。

回顧

担当教員としてのコアセッションは、SA/TAのリクルーティングから始まる²⁾。当初は希望者が多く、不採用者も多かった。翻って、現在、就職活動の影響を除いても希望者は少なく³⁾、2年生にまで採用対象を拡大しても、十分な員数を確保することは困難である。このような状況においては、頭数の確保が至上命題となり⁴⁾、ほぼ無条件で応募者の採用を可とするのが実情である。そこで、SA/TAの能力水準には、初心者から日商1級合格者や公認会計士試験合格者に至る

まで、以前にも増してバラツキがある。

開講当初は、SA/TAによる授業を、教室後方から観察する。筆者は、①大きな声でゆっくりと話しかけること、②重要事項は何回も繰り返すこと、③なるべく受講生に背を向けないこと、④「あれ」「これ」「それ」等の指示語はなるべく使わないことを心がけるよう、アドバイスしている。教職(商業科)志望者については、文科省検定済教科書に基づく仕訳様式、記帳順序の徹底のほか、漢字の筆順等についても正しく板書するよう、厳格に指導している。

業務に習熟してくると、SA/TAは、「過重負担問題」に直面する。彼ら彼女らは、あらゆる方向に過熱化することがある。簿記会計について具体的にいえば、実物を書画カメラに投影すればよいだけにもかかわらず、エクセルを用いて試算表・精算表等のフォーマットを独自に複製するSA/TAがあらわれる⁵⁾。また、本講義の内容を1から懇切丁寧に説明しようとするSA/TAもあらわれる⁶⁾。これがエスカレートしてくると、彼ら彼女らが本来取り組むべきはずのゼミ等の課題を疎かにするようになる⁷⁾。そこで、現在は、担当教員が指図書に加えてそのまま使用できる補足資料を作成し、必要に応じてSA/TAがそれをアレンジして使用するようになっている⁸⁾。

また、第1セメスターから唯一履修できるコアセッション簿記会計Aは、ほとんどの新入生が本格的な試験を初めて経験する科目となる。そこで、コアセッション簿記会計AのSA/TAと担当教員は、定期試験

1) 本稿は、教員の授業担当について、便宜上「負担」と表記する。

2) 支援室によるサポートもあるが、事実上の採用窓口は担当教員である。採用およびSA/TAの能力水準を担保する責任が担当教員に委ねられることにより、担当教員の物理的・心理的負担は増大する。

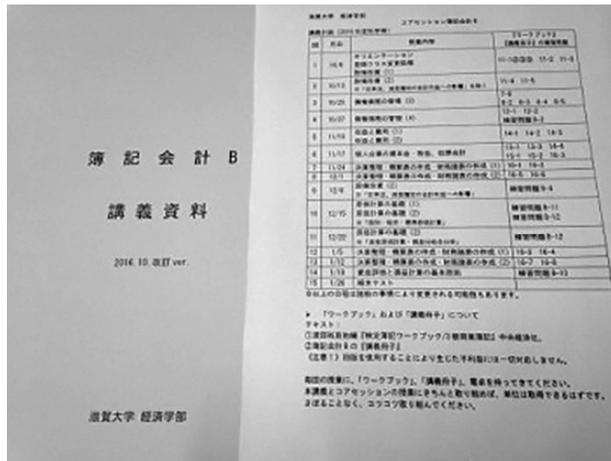
3) 簿記会計については、近年指摘される「会計離れ」という

固有の事情も影響しているように思われる。

4) 同一科目で2コマ連続の担当を依頼したり、他科目の兼任を依頼したりすることも常態化している。

5) 担当教員は、事前に配布資料の提出を求め、資料に誤りがないか確認する約束となっている。

6) これは、コアセッションのみに出席する学生が増加している現象とも無縁ではなからう。



に先がけて、その細則やマークシートの記入方法を⁹⁾、新入生ほぼ全員に周知する役割を担うこととなる。これに関して、近年の員数不足により、試験時にはいわゆる「ワンオペ」状態も不可避免的に生じる¹⁰⁾。

さらに、近年、論点の改正が頻発しており、未知の論点を取り扱う必要も生じている。改正論点の周知は事前に行うものの、不安を覚えるSA/TAは、自主的に本講義に出席している。もちろん、給与は発生しない。憚らずに言えば、改正論点を十分に理解できないSA/TAもいる。

以上のほか、時として、SA/TAは、教員と同様の心理的な負担を負う。受講生による私語、スマートフォン操作、居眠り、途中退出、資料・板書の写真撮影、ネットでの中傷等によるストレスを受ける。また、筆者は、毎学期のように、SA/TAと教員間、SA/TAと履修生間のトラブルに直面し、様々な立場からトラブルへの対処を余儀なくされてきた。なかには、高校生の時に大学案内でSA/TAに興味をもち、希望をもって本学へ進学したSA/TAが、トラブルに巻き込まれてしまい、継続をあきらめたケースもあった。私見であるが、彼ら彼女らへのフォローは、必ずしも万全ではなかったように思う。

展望

SA/TAを活用した教育実践は創設から相応の年数を経過し、勤続疲労を起こしつつあるように思われる。今後も単位を付与することを前提とし、十分な員数を確保したうえで当該実践を内外にアピールする方針を採るとすれば、当事者の物理的・心理的負担を軽減するための方策を本格的に検討してもよいであろう。

当事者の負担を軽減するキーワードとして、大学としての「個への対応」¹¹⁾を挙げておきたい。実現可能性を棚上げにすれば、例えば、編入生や留学生に対するサポートを大学としてこれまで以上に厚くすれば、授業運営はより容易になる。また、とくにB科目について、A科目の試験結果をふまえた習熟度別にクラス編成をすれば、レベルに応じた的確な授業を展開できる。さらに、他大学における先進事例を参照し、SA/TAの知識および授業運営能力の水準を大学として担保・保証するしきみを構築すれば¹²⁾、採用コストも抑制できるはずである。

ラジカルな変革を推進する組織風土が醸成されてきたとは言いがたいが、いわゆる「責任世代」の奮起に期待するところである。

- 7) 授業準備に要する給与は、発生しない。
- 8) 創意工夫あふれる資料が作成されなくなるという弊害もある。
- 9) 本学のフォーマットは、いちばん左が「1」となっており、「0」から始まる各種試験のフォーマットと異なる。これが、思わぬマークミスを生発する要因となっている。
- 10) このような事態が生じることがないよう、学科別に登録ク

ラスを指定するものの、指示に従わない者も多く、慢性的にかかる状況が生じる。

- 11) 本講義とコアセッションを同学期に履修するよう規程が改正され、さらに簿記会計Aは資格取得による単位の認定も可能となり、一定の改善がなされている。
- 12) また、その過程において、当該実践の存否を判断する材料も揃うことであろう。